# ミュージアム通信


小川原脩記念美術館　☎21-4141
観覧料：一　般　500円（400円）
　　高校生　300円（200円）
　　小中学生　100円（50円）

倶知安風土館　☎22-6631
観覧料：一　般　200円（100円）
　　高校生以下、美術館観覧者無料


開館時間は9時～17時
　入館は16時30分まで
※（　）内は10名以上の団体料金
**3月の休館日　毎週火曜日**

## これからの日本画へ

先月から開催されている「鼓動する日本画 CONNECT-MOVE」展をご覧になった方は、さぞや驚かれたことでしょう。いわゆる日本画に始まり、木製の建物、壁に浮き出たレリーフ、さらには書、漫画、イラストレーション、アニメーションまで展示されているのですから。この展覧会を企画したのは、現在、道内で活発な制作活動を展開している日本画家の皆さん。タイトルからも、さまざまなジャンルと手を組みながら、これからの日本画の世界を探っていこうとする熱い想いが感じられます。

館長　柴　勤（つとむ）

## 展覧会のお知らせ

### ■企画展示

**開館20周年記念展「鼓動する日本画　CONNECT-MOVE」**

道内在住の日本画作家7人と道内外の招待作家による企画展。日本画だけでなく、書、立体造形、漫画、アニメーション、イラストレーションなど幅広いジャンルの作品から、従来の概念を超えた日本画の世界をどうぞお楽しみください。

会　期：開催中～4月12日(日)　会　場：第1展示室

**人気投票がつくる展覧会　小川原脩展「私が選ぶ小川原脩」**

皆さんが選んだ1点1点に思いを巡らせながら、皆さんが主役の「小川原脩展」をどうぞお楽しみください。

会　期：開催中～4月12日(日)　会　場：第2展示室

## アート・イベントのお知らせ

### ■体験型講演会

**「日本画のひみつ」**

スライドで歴史や特徴など日本画独特の世界を紹介。金箔をはるなど、実際に道具や画材を手に取ることができる体験型講演会です。

日　時：3月20日(金)13時～　会　場：当館ロビー（無料・申込不要）
講　師：平向功一さん（日本画家）

※同日には「蝦夷桜屏風」制作ワークショップも開催（要申込）。
詳細は美術館にお問い合わせください。

### ■ミュージアム・コンサート

**「あなたが選ぶ音楽会」**

テノールの佐藤貢さんを中心にヴァイオリン、クラリネット、ピアノで構成される札幌のアンサンブル。開催中の「私が選ぶ小川原脩展」に合わせ、皆様からのリクエスト曲によりプログラムを組み立てました。

日　時：3月21日(土)14時～15時　会　場：当館ロビー（無料）
出　演：コンセール・アミ（佐藤貢さん・丸山みゆきさん・吉田聖子さん・塚越由り映さん・柴瑞穂さん）

### ■土曜サロン

**世界美術館紀行～特別編①～**

**「青春白樺美術館」2000年（20分）／青春白樺美術館**

日　時：3月7日(土)14時～15時
お話し：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

**アート探訪〈みて・きいて〉38 ～ポスト印象派⑦～**

**「アンリ・ルソーの素朴な夢」**

日　時：3月14日(土)14時～15時　お話し：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

### ■アート・シネマ館

**「彫る・棟方志功の世界」1975年（41分）**

版画家として国際的な名声をもつ棟方志功の作品の全貌を紹介すると同時に、その特異な日常生活にも密着したドキュメンタリー。ベルリン国際映画祭など多くの映画賞を独占し話題となりました。

日　時：3月28日(土)14時～15時　お話し：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

**3/1 ～ 3/9 は 39ART ウィーク**

3月9日(月)は39ART（サンキューアート）の日。美術館は期間中、団体料金で観覧できます。オリジナルグッズのプレゼントもあります。



# 感動の一点

『水牛』
1980年　小川原　脩　画

海外から押し寄せる芸術潮流、1930年代にシュルレアリスム、1960年代にはアンフォルメル、その大流行に小川原脩も若かりし頃に衝撃を受け、吸収し、研究を重ねました。それは、西洋画のみならず、あらゆる分野の作家にも影響を広げていました。小川原と同時代を生きた北海道出身の日本画家、片岡球子（1905-2008）、岩橋英遠（1903-1999）らの画業を紐解くと、それらの影響を受けた作品に取り組みながら、次第に自身の個性を確立した画風へと到達してゆきます。

時は流れ1979年の中国・桂林来訪以降、水墨画のような東洋の世界を自らの絵によって表現しようと苦心した小川原。油絵の具を薄く塗り重ねてゆく技法を編み出し、悠々と大地を行く人と水牛の姿を、余白を持たせた空間に描き出しました。時折、小川原作品を前に「これは日本画ですか？」と質問をいただくことがあります。油彩画にして、東洋の空気感をまとっているのでしょう。

一方、現在の日本画は、クラシカルなイメージを軽く飛び越え自由自在に展開し、既成概念にとらわれない姿は小川原とも通じています。当館初の日本画グループ展「鼓動する日本画」、どうぞお楽しみください。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

# ふるさと探訪

## ―粘土地・北海道の開拓で活躍した鍬（くわ）―

*443回*

『明治二十五年、この地にはじめて鍬（くわ）をおろした阿部半平らの先人がはいったころは「千古おのを入れざる」の言葉のとおり、うっそうとした原始林と、ズブズブぬかるヤチ原だった。』（倶知安町史昭和36年）

明治中頃、未開の地だった倶知安原野の様子はこのように語られています。重い粘土地や、泥炭でぬかるんだ湿地が多かった倶知安原野を開拓するには、さぞ大変な労力を払ったことでしょう。また、果てしなく続く木々の間を覆うササは、人々の行く手を阻みました。

そのような中、重宝されたのが窓鍬（まどぐわ）でした。三本鍬（さんぼんぐわ）の先に刃を付けた鍬で、名前は刃に1～2個の穴（窓）が開いていることにちなみます。刃がついたことでぬかるんだ場所でも打ち込みやすく、窓があることで刃に土が付きにくいため引き抜きやすいという使い勝手の良さがありました。また、刃先を鋭く研ぎ澄ませばササなど植物の根も簡単に切れたことから、倶知安はもちろんのこと、北海道の広い地域で使われました。

鍬と一口に言っても形はさまざま。昔の人々は用途に合わせて、多様な鍬を使い分けていたのですね。

文：山口　麻莉奈（倶知安風土館　学芸補助職員）

窓鍬（まどぐわ）の羽床（はどこ）

三本鍬（さんぼんぐわ）の刃床（はどこ）